

昭和四十二年十月九日 〆講演

## 「現代教育の展望」

教育評論家 村松 喬先生

今日は、しばらく時間を借りまして、はなはだ漠然としていますが、現代教育の展望、要するに何処に問題点があるか、ということと、多少その将来性について、御一緒に考えてみたいと思います。主として、大学のことになるかもしれません。

さきほど私のところへ突然、大きなリュックサックをしょった三人の神戸大学の教育学部の学生の訪問を受けました。丁度私が、「教育の森」という本を書いているので、神戸大学教育学部の現在の状況、主としてその就職状況について、聞いてもらいたいことがある、ということです。その内容は、神戸大学教育学部というのは、当然兵庫県の教師をする人の大部分の、教員養成学校のような性格を持つ所です。ところが、神戸大学教育学部を出る学生、出た学生が、兵庫県あるいは神戸市の教員試験を受ける人と落とされる者が非常に多い。今年は、二百六十何人受けて、六十何人落ちたというのです。

いわば兵庫県の教師をつくる大学の学生を、そんなに落とすのは何事だろう、と思つて話を聞いてみると、すぐわかりました。今日の情勢ですから、その六十何人の人達の思想的な問題が、一つのフィルターになつていよう、ということなのです。その学生達は、やはり大体が大学の中で、あるいはサークル活動ということで、自治会活動などの活動を活発にやっていた人だそうです。また、そのようなことは、今年だけではなく、ここ数年続いている、資料を見ると、昭和三十五、六年から毎年四十人、六十人という数で落とされているのです。そこで私は、こういう実情があるのに、神戸大学教育学部の教授の人達は一体どうしているのだ、ということとを聞きました。その返事は、教授達は県の教育関係を相手にしていたのでは、落とした張本人なので話しにならない、しかし現実には教員は不足している。そこで各地の地教委をかけずり回つて、正式の資格の教師でなくてもいい、要するに助教みたいなものでいいから使つてくれとここ数年その就職のできない六十何人

かを就職させることに一生懸命だといひのです。

この話を聞いて、実は私はあきれかえつてしまいました。というのは、もし神戸大学教育学部の教授の立場になつて、自分の教えている学生が就職できないのなら、この場合にはやはり彼等を就職させるのは、大事なことにちがひありません。しかし数年間もそういう状態を続けて、それで済むことなのか、ということですが、つまり私が教授であつたなら、神戸大学の教育学部は、地方大学という性格上、兵庫県の教師をつくる責任を持つていふのだ。そして、我々は一生涯懸命いい教師をつくるべく努力をしてきた。それを、教育委員会が大量に拒否するのはどういふ理由なのか、納得のいく理由を聞かせてもらいたい、しかし我々はそこにいかなる理由があろうとも、我々が教育をしている学生は、兵庫県の教師としては適格だと思つていふことを主張するだろうと思ひます。ここにおそらく大学の持つ非常に大きな、その地域圏に対する使命があるはずだし、その姿勢がなければ、

大学の自治を主張することもできないと思うのです。

ところが、神戸大学の教授の諸氏は、そういう姿勢をとることができない実情のようです。それはおそらく、その教授の人達が、大学というものの本質をわきまえていないにちがいないと思うのです。目の前の六十人の就職も小さな問題ではありませんが、教育をするということとは、その六十人だけのためではないのです。将来があるのです。その将来を支えて行くのは、神戸大学教育学部の一つの大きな組織、学校です。大学です。これを本質的に維持する方向に進まないで、目前のことだけに左右されていては、大学の本質は失われてしまう。しかもそういう状況が何年も続いているということ、またそれは思想的な意味であるにしろなにか、本当に思想的な意味でなのか、ただ自治会活動をしたという経歴的な意味で問題にされていること、更にそれに対して、そこでまた行なわれることが、就職の時に無難な学生をつくるような授業に変えられてしまうとすれば、そこに大きな問題があると思います。たとえば、英語関係の就職率が悪いと、たちまちそのカリキュラムに英語の時間をふやすというようなことをやるわけです。これは大学の姿勢と、また教育の中心が変ってきてしまうことになり、その大学としての自信を持った教育は全く行

なわれず、外からの圧力に屈していくような教育が始まってしまふことになり、そういう大学の姿勢が外から侮蔑を招き、御しやすいと思われ、ついには大学の本質を失ってしまう、単なる教員養成の学校に堕してしまうおそれが多分にあるわけです。

言っているのかどうか、またそういう道を志している方には申し訳ありませんが、これにはある理由があるのです。現在、地方大学に多いのですが、教育学部というのは、昔の師範学校がそのまま大学になったところが大部分です。そして昔の師範学校の教師が、戦後、新制大学の教授になってしまったわけです。そういう人達が、本質的に大学の教授としての資格を持っているかどうかということも、実は大きな問題なのです。しかし、そういう問題と同時に、今日、教育に対する国家的支配が行ないやすくなってきたという状況もあるのです。

もう一つ申し上げたいことは、そこにやってきた三人の学生が、大きなリュックサックをよつてきたので、羽田帰りじゃないかと聞くと、そうではない。東京にやってくるお金がないので、ヒッチハイクをして、トラックを乗り継いでやって来たというのです。この彼等は、本当に近代人だと思います。お金がなくても、何か訴えたいことがあると、とにかく、東京までやって来るのです。こういう学生は、昔はそう沢

山はいなかったと思うのです。ここに昔の学生つまり私共ですが、私共と今の学生諸君とは確かに違うものがある。同じ年代の者同士が、何も言わなくてもわかる、そういう関係、つまり相互理解は、我々とあなた方の年代にはどうもないらしいと思います。やはりそこには、相互の話し合いを充分に行なうことよつてのみ、理解が可能になる余地があるらしいのです。つまり、学生が変ってきているということを否定しては、今日の大学の問題にしては、教育の問題にしては、すべて解決はつかないと思います。解決がつかないどころか、その関係、その問題の性格などすべて、悪化する方向にむかうだろうという気がします。

話は飛びますが、例の羽田事件(一九六七年、昭和四十二年)です。あのような事件がおこるだろうということは、予想できないにしても、何かありそうな気配は、私共にも感じられました。法政大学の紛争、そしてその性格について知っていれば、何かの時に何かが起こりそうだという予感がしていた、といつてもいいと思います。このことについては、ラジオ・テレビ・新聞でも、論じ尽くされる位、いっぺんに論評がでて参りましたが、少々乱暴だと思われるものもあります。その中には大いに傾聴すべきものもあるのですが、私の意見を申し上げるのは、実は大変難しいのですが、あえて申し上げます。

やはり学生が暴力をふるって、その結果非常に悲惨な状態を招いたということは、容認することはできない、そういう感じがします。また、あの事件を誘発するものがあつたということ、これは確かなことです。誘発をしたものは、これは引き金をひくような単純なものではなく、醸成されていて、常を感じられている何らかの雰囲気というようなことですが、そういう雰囲気非常に瀟漫（びまん）していて、それが最近高まってきている。これは学生だけではなく、一般において、その空気が相当濃くなつてきているということだと思います。

つまり、佐藤（栄作）さんの東南アジア訪問という一連のスケジュールの性格に対する考え方、そしてそれがどのような意図で行なわれたというような作用を及ぼすか、ということについては非常に多くの批判があつた。ところが、これに対してほとんど納得のいくような説明はされず、予定のスケジュールが、本当のスケジュールとして実行されていく、そういう状態に対する非常な批判と不満の空気が、社会的に瀟漫していた、というのは事実だと思います。

しかし、それに対する批判という意味で、結局問題は非常に単純な方法論ということになるわけです。学生が学生運動をする、あるいは政治に関心を持つということは、今日では避けられないことだと思います。つまりこの今日自

体が、非常に政治的時代であるし、また同時に非常に経済的時代です。そして全てにおいて、精神性というようなものは、ずりおちてしまっている時代です。そして、学生だけがそういう時代から遊離したところに住んでいっているとしても、またこれは不可能なことです。非常に政治的時代だということは、全てに政治が入りこんできているということです。教育の中に政治が入りこんできている趨勢、これが今日ほど濃厚に現われている時代はありませんし、その意味での学生の反発は、学生の中に一般的にあることです。これは羽田事件とは関係なく、当然のことだと思つたのです。そのように考えてみると、羽田の事件というのは、その現象面においては学生諸君のやったことが必ずしも正しいとは言えませんが、しかしもう一皮むいてみると、その底にもっと複雑な問題が潜んでいると思います。

あるテレビ局で、羽田のデモに参加した三派系の学生、女子学生も含めて十数人を集め、それからそれに対する批判の立場の人達として一般の学生数人、一般のお母さん、TBSの解説をする古谷さん、それから本多顕彰さん、羽仁進さんというような人を集めて、いわば対決をさせる番組をやりました。そこで、あの事件の行動に対する批判が、全学連の学生達に集中するわけなのですが、これに一つ一つ非常に克

明に、そして正確に、また誠実に返事を彼等がするので。しかも攻撃といつても、その現象面だけの攻撃、批判というようなことなので、その批判が彼らには全然こたえないわけです。誠実ではあつても、非常に手軽に対応できるような批判しか出てこないのです。そして批判する側の方がむしろ興奮していて、返事をする側の全学連の諸君の方が冷静な態度なのです。むしろ全学連の宣伝をする番組になつてしまいました。テレビを通じて、彼等は、非常に真面目な、そして物ごとを本質的に考える人たちがいるという印象を強く与えたようです。

そこで私が思い合わせることは、法政の事件があつた直後に、中央公論社が、東大をはじめ、国際基督教大学、明治大学、法政大学、早稲田大学の学生部長を集めて、学生運動についての座談会をやり、その司会を私がさせられたのですが、その時に学生部長の諸氏がいうのには、彼等が真面目な学生だということは認めてやらなければならないと言つたのです。その政治性について、言われていることですが、今日の全学連の動きというものは、法政の動きにしる、遡って慶応、早稲田、明治、中央、法政と、この順序をたどつてみると、一九七〇年の安保改定をひかえて、学生達を革命という意味で練り上げていられると言われていることについてただしてみると、大部分の学生部長諸氏は、それを

そのような政治的見方をする事は、むしろ外の宣伝に陥ってしまうことであり、これは大学の問題として本質的に考えなければならぬ、というのです。

しかし実はここに問題があると思います。つまり今日の学生運動と、もう一つはその紛争をおこす場合の中核をなす人達、学生達、こういう動きが、本質的に大学の中から出てくるものなのか、あるいは外の政治勢力が大学の中に浸透してきておこるものなのか、その見極めです。

その見極めを充分にしなければならぬのです。そしてもしこれが、大学の中から大学の今日のあり方、またその本質の意味で出てくる、というように規定した場合にどういうことがおこるかという点、そこにそれこそ外からの介入が可能になる余地が出てくるわけです。つまり学生に対する措置、学生に対する教育に何か欠けたところがあれば、これは行政的措置で対処しなければならぬということになってくる。そうすると、今日進んでいる、大学に対する管理的な体制が、さらに一層拍車をかけることになるわけです。

ところが一方、このように、それを政治的なことであり、大学の本质というより、外からの政治勢力が大学に浸透して、そこに革命の橋頭堡を築こうとしているのだ、という考え方をしても、結局、現実としては、大学とは無関係で

はすまないことになってしまいます。つまり羽田事件に対して、大学の管理に対する法的強化のようなことは考えていないと政府は言っている、しかしその管理が、微に入り細をうがって進められてくるであろうことは、予想しなければなりません。いずれにしても、今日の大学は、神戸大学の教育学部というような本質的弱さがあるにしろないにしろ、やはり非常に危険な状態におかれていることは、その両側面から考えられます。

そこで、大学をどのように維持して行き、大学の機能を本来的な意味でどのように發揮していくかということは、非常に重要な問題になってくると思います。大学に対する姿勢が、昭和三十五年の安保闘争の時から急激に政治性をもつて考えられ、そして大学管理法案が考えられたのです。しかしこれが世論の反対で成立することはなかったのですが、それに替わる意味で、大学に対する文部省令とか、次官通達というようなことで、法律に替わった規制が加わっていることは事実です。つまり学寮の管理規定のようなものが文部省から出されると、学寮を新しく建てなければならぬとか、建て直しをしなければならぬという大学は、国立の大学や地方の大学の中にたくさんある。その時、その文部省の出した管理規定をのまないとお金を出してくれない。そこで大学としてはその

規定をのんで学寮を建てる。さていざ学生を入れるという時になって、学生はその文部省の決めた学寮の規則に反対する。このような学寮問題でもめている大学は沢山あります。今日、そのように細かいところにまで管理という姿勢は進んでいるという状態です。大学はこれに対処しなければならぬし、学生も対処していかなければならぬわけです。

その時に必要なことは、大学の当局と学生とが一体になって、この大学の自治を侵して来る、そのような力に対して抵抗する、対抗する姿勢を持たなければならぬということです。しかし大学の実情は、大学の当局と学生達とが大きく分裂してしまっているのです。これは、外から攻撃する側にとってみれば、くさびを打ち込む大きな隙がそこにあるということになります。そういう姿勢が大学の中にあると、将来大学を本当の大学として維持して行くのには、非常に困難な状況がでてくると思います。その位、今日の大学は、危機に直面していると思われまゝです。しかし私が今申し上げたような危機感が大学当局にあるかというと、比較的うすいようで、学生の動向に対する危機感だけがあり、また学生の側には、大学当局の出方、これが権力体制の末端だというような受け取り方、そしてこれが、対抗すべき一つの勢力というような受け取

り方をしている。すると、これはまさに *divide and rule* (分割統治) の原則を適用できる状態が今日できていくわけです。私はそのように、今日の大学の危機をとらえなければならぬと思うのです。これは大学の持つている本質、またその本質から発する学問の自由、大学の自治、学生の自治、これを守って行くという意味から、どうしても必要な考え方だと思うのです。

そこで大学の自治ですが、大学の自治について、あいまいな考え方をしているのは、何も神戸大学の教育学部だけではなく、大多数の大学において、大学の自治については、正確な、そして原則的な考え方を実はしていないようです。つまり大学当局です。この大学当局を形成している人達というのはもちろん学生ではなく、学生との関係からいうと、もっとも年齢のひらきの低いところでも兄貴分であるし、大体学生とは親子ほど年のちがう、教授または大学当局者です。そういう年齢の開きの問題ということも、今日の日本の社会では、実は大きな問題を持っています。この当局者側は、今日の学生は昔の学生とちがうということから、彼等と異質の学生に対処するには、やはり取り締りの対処がもっとも手っ取り早いという考え方をするようです。

今日大学の中に厚生補導部というのが、非常に大きな意味を持って存在し、厚生補導部長な

どがいたりするらしいのです。厚生補導といいますが、社会的感覚では、中学校の不良少年を善導補導するというような意味ですけれど、今日ではこれを大学生に適用して、同時にいわゆる厚生面、つまり福祉的な面の指導などの世話もやっているようです。しかしそのようなことをやっているというのは、取り締まりという意味を持つと同時に、もう大人になっている大学生に対して、過剰保護ではないかという疑問さえ生じてきます。ところが、一方、今日の大学生はそのように、手とり足とり指導をしてやらなければならないのだ、という考え方もあるのです。そうすると、大学生は厚生補導の対象になるということになります。これは大学生に対するはなはだ侮蔑的な考え方で、決して名譽なことではないと思います。しかし現実はそのような状態にあるわけです。あなた方自身がどう思われるかわかりませんが、今日の大学生と昔の大学生とが、年齢的成長という意味から、そんなに子供っぽくなってしまうのかどうか。これは外から見て客観性があるのかどうか。またあなた方自身が中からみて、人間的にまだ子供の段階だと思えるかが問題ですけれど、一方、二十歳を成年として、それ以後を大人として扱うというはつきりした基準があるので、実際に直接扱う大学の扱い方が、大学生を子供として扱うような態度になっているの

です。子供だとすると当然そこに自治を認めるといようなことはなくなってきます。ですから国立大学協会の、大学の自治に対する、学生の自治に対する考え方というものは、相当に政治的です。そして自治は大学にあるとしても、大学の上層部にある教授会にだけ、あるいは理事者側だけに自治はあるけれども、学生の自治は全面的な意味で、大人として学問をする人間という意味で認めていない。したがって学生諸君は、大学の自治、学生の自治ということについては非常に熱心ですが、大学当局はむしろはなはだ冷淡な態度を取っているのです。

さてもう一度もとへ戻りますが、今日の学生がそれ程子供なのかどうか。これを一つ考えてみたいと思います。東大の教育学部の心理学の講師で、杉本さんという人が、去年、東大生の性格的調査をして、そのレポートをまとめました。それによりますと、この対象は東大生ですが、大学生全般のこととして理解しなければならぬと思うのですが、今日の大学生は、大学生になっても、いまだに精神的離乳ができていない、要するに子供っぽいなということです。そこに大学の自治、学生の自治と今日の大学生との間にギャップがあり、そしてそれが問題を非常に複雑に、解決のつきにくいものとしてしまっているという状況が生まれてくるわけです。そこで問題は、そのような精神的離乳がで

きていない大学生が多いということが事実であるとすれば、何故そのようなことになったかということを考えて見る必要が出てくるわけです。そこでこれはもう大学の問題ではなくて、大学に至るまでの教育問題、つまり大学生になるべき人達をどのように教育し、どのように育ててきたかという問題です。そうすると一つのことをそこに発見します。

杉本さんはまた、今日の大学生と十年前の大学生とは随分違いがある、といっています。もつと近くでは、安保の時の大学生と今日の大学生とは相当違うというわけです。どういう違いかということは、はつきり指摘してはいないわけですが、しかしそこに違いがあるということが客観的事実だとすれば、それを裏付けるような別の面が考えられます。つまりその五年なり七年なりの間に、大学生になる人達の受ける教育が相当変っているということです。つまり昭和二十五年の時点で大学生だった人達は、おそらくあなた方よりはるかに楽な入学試験、あるいは入学試験の準備をして大学生になることができたと思うのです。ところがそれからはじまった——いわば所得倍増の高度経済成長というような政策とも関連しますが、進学熱の非常に高まりと、そこにおこる非常に激しい受験競争と、受験の準備という、高校の教育を非常に変えるようなことがおこったわけです。これは

年々激しくなつて、しかもそれが高校生の急増という時期と合致したということもあつて、競争は更に激化されたということになると思います。その大きな変化がどのような具体的結果を見せているか、その結果と非常に密接な関係がありそうに思われることがおこっています。

というのは、大学の中で留年する学生がここ数年激増しているわけです。激増する曲線と受験準備のそれとは少しずれるわけですが、その二つの曲線は確かに、その性格は一致しているはずで、つまり、受験勉強ということが、頭脳的に何かひどい影響を与えているのではないかということが予想されるのです。これを直接結びつけることが正しいかどうかはわかりませんが、曲線を描いてみれば理解できることだと思えます。しかもそこには、ある意味では立証されていることですが、非常に激しい、難しい入学試験に合格したものが、果して優秀な人間だけかということがあります。これは第四回の世界の国際大学協会が東大で開かれた時、あるフランスの大学の関係者がいつていたことですが、非常に難しい、激しい競争に合格してくるものよりも、落ちるものに優秀なものがある可能性は非常に大きいというのです。そこで合格をした人達の頭脳という問題になるわけですが、今日の大学生の頭脳は、受験勉強が激しくなればなる程、競争が激しくなればなる

程、大学生としての学力低下がおこつてくるというわけになります。それは、大学での留年の増加ということと、百パーセント密着はしませんが、相当関係があることは確かです。

事実、今日では大学生の学力低下ということが客観的に言われています。本多顕彰さんが法政の教授をやめてしまわれたのは何故かというと、今日の大学生はもう教えるに足りない連中だということと、教授なんかしている気はないということなのです。また、これは私の直接的経験なので、あえて申し上げますと、新聞社の入社試験に作文の試験があります。私も論説委員ということとその採点をしました。百五十ほどの作文を読みました。ここで肝心なことは新聞社の入社試験ですから、大学の四年であること、将来新聞記者にでもなろうという人達だから、文章という意味でも多少水準の高い人達だろう、という前提があるわけです。そういう前提で読んでみますと、百五十ほどの中で、感心した作文、文章の技術、あるいは内容というような作文は、一つもないのです。作文には、百点満点だとしても、百五十点をつけてもいようなものが、その性格からいってあると思います。ところが百点はもちろんないし、六十点の作文も実はない。そのような時、採点する例の心理としてどうなるかというと、何とかしてその作文のいいところをみつつけようという気

持になるものです。そういう気持になって採点してみると、大体四十点位のところで、一般的なバランスがとれているのです。これは私の一つの発見でした。ここに今日の大学生の頭脳的平均値があるのではないかとことです。

しかし、それでは日本人に果して作文能力がないかという点、そうではないのです。あなた方にしても、小学校の時点にはもつとずつといい作文を書いているはずで、日本の子供達は、アメリカやイギリスの子供達に比べて、はるかにいい作文を書く、そしてそういう豊かな才能を持つているのです。これは日本語と英語という問題があり、その言葉をマスターして行く上で、多少英語には困難などところがあるらしいのですが、そういう意味も含めても、日本人の作文能力は決して低くはないのです。そういう子供達が、せっかく中学から高校・大学教育まで受けた結果、非常に作文能力の低い人達になるということとは、一体どうしたわけなのでしょうと思わざるを得ないのです。つまりここに、今日の日本の教育の非常に大きな欠陥があるので、作文というものには、作文をする時に、まず最初にするのは、抽象的なことにしろ、具体的なことにしろ、書く対象を決めるという特徴があります。書く対象を決めても決めただけでは作文は書けません。その対象に対する充分な認識というものがなければならぬのです。

まずその認識をすることが必要です。しかし認識は静止したものであつて、そこに判断力が加わった時に生きてくるものです。ですからそこに要求されるものは判断力です。そして作文ですから表現力が必要になってきます。ということになると、作文をするということは、そして高い作文をつくる場合については、豊かな、正確な認識力と判断力とそして表現力がどうしても必要ということになります。ですから作文能力が低いということは、そのような力が全般的に低いということにならざるを得ないわけです。ところが判断力にしろ、認識力にしろ、表現力にしろ、人間にとつて一番大切な根本的能力であることは明らかですし、教育が一人一人の人間に、そのような力を与える使命を持ったものであることも明らかです。ところが、そういう力を豊かに持っている子供達が、大学生になった時にその能力を喪失しているということとは、中学・高校で大学を目指して行なわれる努力の中で、認識力だの、判断力だの、表現力だのをそぎとつてしまうような事をしていてということになるわけです。ここに今日の教育の非常な特徴があるわけです。

そして私はその一番の元兇を客観テストだと思ふのです。高校に入る、大学に入るということは、客観テストに強くなろうと一生懸命やることだということに集約されると思ひま

す。今日、大学の入試が、あなた方の経験から言つても、全部が全部客観テストだと申しませんけれど、しかしその大部分、六割方以上は、客観テストで、そういうものをやらされた結果合格して来たのだらうと思ひます。この客観テストというものは、今あなた方が考えてみれば分ると思いますが、認識力だの、判断力だの、表現力だのを要求している、そういうテストではないことは確かなことだと思ふのです。そして、そういう力を要求しないということは、そういう力を養わないことになるわけです、また、そういう力を養わないということは、頭脳的な発達という意味からいうと、むしろ破壊作用を頭脳に加えることになる、という論理は成り立つはずで、そう考えてみると、客観テストに強くなつて、そして中学から高校へ合格するということとは、そこで頭脳の破壊が行なわれて、相当に進んだということであり、そして高校三年間でさらにそれにみぎをかけて、大学入試に合格するということとは、破壊の状態が極に達したということになるわけです。そう考えると大学生諸君の学力が低下したということとは当然の避けられない結果だということになるのです。なぜならば、もうあなた方方にはわかっているでしょうが、大学の学問というのは、これは受験勉強のように丸暗記ですむものではなくて、むしろ丸暗記などを排撃する、認識

だの判断だのが根本にあるのです。だから今日の教育は、高校までは一生懸命大学の学問に向かないような頭脳を作っているわけです。そしてその意味からいうと、あなた方は小学生の頃は非常に優秀な、そして作文能力の非常に高い小学生であったのが、中学・高校というところを通して、大学生になるということで、非常に頭腦的には破壊的なことが行なわれ、その犠牲者だということになるわけです。

そこでもう一つ大事なことは、大学は存在しなければならぬし、そして、大学が存在するためにどうしても大学の自治がなければならぬということなのです。なぜならば、大学はここで学問をするところだし、学問は自由を保障されなければならぬ。したがって大学は、自由を保障されるという学問の意味での保障を、大学自体で高めていくということが前提になっっているわけです。学問的な意味で低下するとしたら、そこに自由を保障してやるだけの値打はないではないかということになるのです。したがって大学が存在するためには、やはり内容として、高いものを作っていくかなければならぬし、高いものを作るということによって、自由を主張することができるし、そこに大学の自治を主張する基盤があるわけです。そう考えてみると自治ということと、それとの関連である学生の自治、教授会の自治というようなこと、

要するに大学は教授会だけの自治で存在し得るものではなくて、大学自体が大学当局、教授陣と学生大衆とこの二つによって成り立つのと同じように、学生の自治と教授会の自治と、この二つがはつきり存在することによって学問の自由を守ることができるとだし、またそれを推進することもできるということに当然なるわけです。

ここでやはりでてくる問題は、学生のその本質的あり方ということなのです。その場合には、やはり学生は学問を中心にしなければならぬし、学生はここで学問をする人達だということ姿勢をはつきりしなければならぬと思います。そのような姿勢をはつきりするというところで、教授と学生は——教授にしてもやはり学問をする人であるわけで、その意味で同質の人間です——対立する、内容のちがう人間ではないはずです。ですから同質の同じ方向を向いた人達の集団、これが大学であって、その姿勢を維持し、進めるためには、やはり学生は学問をする人間だという姿勢をはつきりもたなければならぬわけです。その場合には、政治ということとは、大学の中ではやはり関心を払うべきものではないけれども、学問との対比においてみた場合には、大学の中で学生にとって、政治優先という姿はあり得ないと思います。ここに私は大学の核心と、自覚の中心といったものがあると思

いますし、またそうなければ大学を守っていくことはできないと考えます。

私は今、今日の大学生の悪口のようなことをいいましたが、これは、そのような教育を行なうものに対しての批判です。そしてそのような教育の中からしても、先程ふれましたけれども、やはり今日、昔の人間とちがった、新しい種類の日本人が生まれつつあるというのは、これははつきりした事実であって、つまりそこにやはり新しい波があるわけです。そして新しい波はつねに旧来の立場からみた時に、ある種の恐怖感を持ってみられるということは、これもまた避けられないことです。そのような中で、大学が生が大学の本質をはつきり持って、認識して、そしてしかも新しい波を進めて行くということとを、私は大学生諸君にやってもらいたいと思うのです。そしてそれが進んで行くということ、やはり新しい日本が生まれてくるはずで、私共はあなた達と二十ほど年が違うでしょう。ですから、あなた方が私の年になった時には、もちろん、私などはもう存在しないであろうし、そういう時代が必ずやってくるわけですから、いつの日か必ずあなた方の時代が来るわけですから、とすると、何もそんなに今日、明日を急がなくてもいいじゃないかということがいえません。つまりここに、今日だけではなくて明日もあるんだという簡単な人生哲学、そしてたまに



は昼寝をしたり、煙草を吸って空を見上げるといった、そのような余裕も生まれてくると思います。今日の時代はあまりにも急ぎすぎているようですし、テンションも激しすぎるような時代です。だから、我々が無関心になっただけではありませんけれども、しかし急がないで、それこそ蚕が桑を食べるように着実にやっっていくというのを、大学生諸君だけでなく、我々もやっしていきたいという気がするわけです。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。